ベルリン・オリンピック記録映画の思い出　［全３頁］

吉田　廣

（2004年8月2日記）

アテネ・・オリンピックを迎えて、昨年9月8日、女性監督レニ・リーフェンシュタールさんが、8月22日に満101歳の誕生日を迎えてから程なく死去したと伝えられたことを思い出した。（1902年、ベルリン生れ）。[1]~[4] ベルリン・オリンピック（1936年）の記録映画、「オリンピアー民族の祭典」と「オリンピアー美の祭典」を製作した、世界史上で最も有名な女性監督である。この名前は、筆者より年輩の映画ファンならば先刻承知であろう。

その記録映画といえば、筆者には忘れられない思い出がある。中学1・2年の頃だったから、終戦の2・3年後になるが、学校から団体でベルリン・オリンピックの記録映画を観賞したことがあった。テレビの試験放送開始以前で、娯楽も乏しかった時代には、ときたま、学校から許可の出た映画を観たり、団体で観賞したりするのは、非常な楽しみであった。当時のことで、モノクロームであったが、とにかく見事な映像であり、久々に見る日章旗がひるがえる情景に、皆が感激したものである。その映画が、上記2本のどちらか、或は両者をまとめた物であったと思われる。後で、担任の教師が、ヒトラーの姿は殆どカットされていると話していたが、上映の際、どういう処置が取られたかは判らない。

また、筆者は、この映画で、オリンピックとはどういうものであるかを、初めて知ったと言える。この大会当時2歳にすぎなかった筆者に、ラジオ実況放送の記憶などある筈はなく、1940年（東京で行われる予定であった）・1944年は中止となり、1948年はたしかロンドンで開催された筈だが、どんな報道があったか、全く記憶がない。

とにかく、あまり映画を観たことのない当時の筆者は、その映画の正式な題名に無関心であったし、また、映画には、総まとめをする監督という者が存在することさえ知らなかった。

話は飛んで、1980年、小学館が創刊した月刊誌（現在休刊）の1ページで、「レニ・リーフェンシュタール　偉大なる復活」という見出しの記事を眼にした。[5] この記事によって、あの映画はこの女性が監督したものであるらしいことを、筆者は初めて知った。しかし、あの映画が製作されたいきさつや、時代背景を知らなかった筆者は、ただそういう物かといった気持で、そのまま見過していた。

先年、産経新聞に載った、「美の魔力」（瀬川裕司著、2001年、パンドラ発行）の書評[6]で、レニが、冒頭で挙げた映画2本の監督であるという記述を読み、あの映画を製作したがために、彼女は、世界史上最も有名な女性監督となる一方で、ヒトラーの愛

人と噂されたり、ファシズムの宣伝家として非難されることがあると知り、同時に、改めて、あの記録映画を観たときの感激を思い出した。

また、昨年8月、NHK第2放送、NHKカルチャーアワーの、月曜放送分、「生きる知恵」で、担当のドイツ文学者、池内紀（おさむ）氏が、30分づつ2回、彼女について語るのを聴いた。池内氏は1991年、彼女にインタビューしたという。[7]

ここに至って、初めて知ったのだが、レニは裕福な家庭に生れ育ち、幼いときから運動好きで、成人してから、初めは舞踏家として活躍、足の靭帯を痛めてからは、映画女優に転じ、1932年、自ら製作・監督・主演した映画「青の光」（ヴェネツィア映画祭銀獅子賞）が、ヒトラーの目に止り、彼の要請を拒み切れず、1934年に、画期的なドキュメンタリー映画となった、ナチス党大会の記録映画「意思の勝利」を製作し、その流れの上に、あのベルリン・オリンピック記録映画を製作して、ドキュメンタリー映画のジャンルを確立したという。

年輩のドイツ人には、今でも、ヒットラーが残した、ただ一つの良いものは、アウトバーンだと冗談を言うのがいるそうだが[8]、もう一つ、レニをして、ドキュメンタリー映画のジャンルを確立させたことを挙げてもいいのではないかと、今、筆者は考えている。

レニ・リーフェンシュタールの生涯は、幸運がそのまま悲運でもあった典型的な一例とも言えよう。第二次世界大戦後、レニ自身は、ナチスに加担したつもりは全然なかったとしても、協力者と疑われることになり、一時、投獄の憂目を見たという。我国でも、終戦後、軍関係者や協力者に対して一般の人達が持った感情－それは、現在でもどこかで尾を引いているかも知れない－と、それがもたらした事態を思い合わせれば、止むを得ぬ事であっただろう。後半生にはそういう引け目を負うことになる。

それにもめげず、レニは、写真家として活躍を開始し、アフリカはスーダン山奥の種族「ヌバ」の記録写真などで脚光を浴びることになる。前述した、1980年の雑誌記事では、レニが、日本国内で行われる写真展のため来日することにも触れていた。

女性映画監督“レニ・リーフェンシュタール”の名は、ベルリン・オリンピック記録映画の映像とともに、永く記憶されることであろう。（完）

［参照資料］

[1] URL: Wikipedia :

http://ja.wikipedia.org/wiki/

によれば、本名はBerta Helene Amalie Riefenstahl、 最近は“レーニ”とも。トップページから、“人名一覧→職業別→映画監督一覧（海外）→ラ行”で見出される。前半生の年譜、作品等の一覧、関連文献・資料などのリストあり。但し[7]では、“ヘレーネ・ベルタ・アマーリエ・リーフェンシュタール”とあり、始めの2語が入替っている（引

用者は[7]を採る)。

[2] URL:レニ・リーフェンシュタール ART & LIFE:

http://www.cine-tre.com/leni/

第二次世界大戦後、レニが関係した映画2本のロードショー(2003年10月4日開演)に関する解説である。トップページを開いて現れる、「ワンダー・アンダー・ウォーター原色の海」または「アフリカへの想い」の紹介ページ(そこに掲載された画像は一見に価したが、前者は、入れ替わった)上辺または下辺の、“バイオグラフィー”タブをクリックすれば、彼女の、生年から100歳までの年譜(日本語)が見られる。ほかにも各種資料のページを開くタブがある。(現在これらのページは、ダウンロード不可能となっている)

[3] レニ・リーフェンシュタール & 舘石明 コラボレーション写真展特集:

http://www.nikon.co.jp/main/jpn/society/feature/leni/gallery.htm

2003年8月22～9月5日まで開かれた写真展の紹介。「レニ・リーフェンシュタール・プロフィール」のウィンドウをクリックすれば、[2]と全く同じ体裁の年表が見られる。

[4] RENI RIEFENSTAHL: (写真を主としたレニの資料集。英語／ドイツ語を選択できるが、本名の表示は無いようである。)

http://www.leni-riefenstahl.de/

[5] 写楽 Shagaku 1(2), p.274(1980年7月1日, 小学館)。

[6] 産経新聞2001年10月22日付朝刊12版(水戸市内で購読)。評者は 中条省平(学習院大学教授－当時)。

[7] NHKカルチャーアワー テキスト 2002年7～8月、生きる知恵(下) 第8章、pp.101-126(2002年7月1日、日本放送出版協会)。

[8]藤田五郎 著、 ドイツ語のすすめ、pp.40-43(講談社現代新書 1964年)。(この個所で著者は、ヒトラーのもう一つの功績として、ドイツ語の文字を、フラックール体－いわゆるヒゲ文字－からローマ字体に改めさせたことにも触れている。－引用者)

[資料終]

Copyright © 2004 YOSHIDA,Hiroshi All Rights Reserved: